

私 の 研 究

三 浦 省 五

私は、昭和40年に広島大学教育学部を卒業し、市内の中・高等学校に英語教師として勤務し、さらに教育学部に帰って外国語科に勤め、紛争中に大学院修士課程を経て、博士課程に進学の機会を与えられ、その一部をエディンバラ大学で過ごした。院生の時代に、教育学部附属高校や短大、日本語を第2言語として教えている小学校にも勤めたりした。教育学部に入学以来、英語教育（あるいは、当時の教養部におけるドイツ語教育やフランス語教育）という非常に身近な教育現象に興味は持っていたのであるが、これを客観的、科学的にとらえようとする態度を持つに至ったのは、教育学部の垣田教授のお蔭である。私は、学生時代を含めて、教育学部に13年いた。研究者にとって転勤は大変なことであるが、幸いにも教育学部とは同じキャンパスにあり、私の研究に必要な基礎資料の多くは教育学部に依存しているが、今まで不可能であった新しい分野の研究は本学部で行なうことができ、私にとって大いにプラスになると信じている。

さて、英語教育の分野で、「英語教育学」なる名称が生まれて約10年になる。その間、日本の各地に「英語教育学会」なるものが誕生して7・8年になる。英語教育の分野も、やっと市民権を得かけたのであろうか。英語教育という現象を科学的にとらえようとするこうした動きは、他の外国語の教育（第2言語の教育も含めて）や母国語教育をも含めた言語教育についても同じ動向が見られる。しかし、英語の教育にかかわっている諸条件・変数の膨大さから、そのアプローチは容易ではない。記述の方法すら明確でない変数が多いのもその1原因であろう。ただ現段階で言えることは、英語教育学の研究は、現在存在している英語教育の諸現象をとらえ、得られた資料を分析し、仮説を設定し、調査、実験により、その現象から客観的な教育原理を引き出し、さらにその原理を体系化・組織化する方向をとるだろうということ、そうしたものが今日的課題に沿った研究と考えている。英語教育学を構築する際、英語教育の目的・目標に関する領域、教材内容に関する

領域、学習者に関する領域、教育方法に関する領域、教育評価に関する領域がその中核をなすことは容易に考えられる。それらの領域とともに、言語教育の本質とも考えられる言語の本質と機能および言語使用の変遷、英語教育の地理的・歴史的研究、言語政策の研究、教師教育の研究が含まれている。英語教育学は、言語学、心理言語学、社会言語学、心理学、教育学、工学など関連諸科学の援用を得つつ、こうした領域に包含される変数のからみ合いの中で行なわれている英語教育を科学的にとらえ、1つの独立した「学」を志向している。

私は、現在、LLを用いて、教授形態の1つである英語の個別化教授・学習を実践しているが、果して成功するか否かその結論はまだ出ていない。共同研究としては、今日まで世界各地で発表された外国語教育に関する主な論文を可能な限り収集し、それらの基礎資料を体系づけ、整理している段階である。また教育学部時代からの継続で、中学校、高等学校の英語教材を分析している。これらの研究は今後も続けていくつもりであるが、総合科学部においては、学生の英語学力の到達度と教材、教授法との関連、および英語（教育）に対する学生の情意面の変化をとらえてみたい。総合科学部に学ぶ学生の80%内外の者が現行の英語教育に好意的態度を示さないとしても、そこには、そのようになる科学的法則が働いているはずである。その深層にある事実を明らかにし、教育場面にフィードバックさせることにより、何らかのPractical theoryが見出されれば、この研究も教育に貢献できるであろう。

英語教育の理論的研究もさることながら、それに基づいた実験・調査研究には多くの問題点がある。教育研究体制の問題から各種テスト作成まで問題は山積している。教材作成、教授・学習、評価などに関する実践的研究には学際的アプローチが必要で、そうした研究機関の設立が望まれる。

最後に、総合科学部に招かれ、新たな仕事を与えられました事に対し、感謝申し上げます。

（外国語 講師）

私 の 研 究

小 野 光 代

日本の標準語は、明治以来東京地方の方言、それも山の手の話し言葉に基づいて成立したものであることには疑問の余地がない。それに反してドイツ語の場合、現在の規範性を持った共通語の起源は何処に求められるかという問は、常に多くの学者の論争的となってきた問題なのである。何処という問は、また何時という疑問と密接に関係している。ドイツ語史の上で近代語の段階は、いつ頃からどの地域を中心に始まるかといえるのであろうか。まず最も容易に考えられることは、何処という問に対してある一つの地域を想定することである。この例としてラインラントとザクセンという二つの地域が最初に浮び上ってくる。8世紀末から9世紀にかけて所謂カロリング・ルネサンスを開花させたカール大帝の宮廷語が中世の吟遊詩人達に引きつがれ共通語への遠い源となった、とK. ミュレンホフという文献学者は考えたのである。このカール大王の宮居したアーヘンの位置するベルギーと境を接するラインラント地方がドイツ語圏の西の端だとすれば、ザクセンは東の境界の地である。このザクセン地方は、マルチン・ルターの名と結びついてあげられる。ルターは卓語録の中で自分の言葉について「…私はザクセン官庁語に従って書く…」と述べているからである。語学的な見地からは、このルターの言葉をそのまま受け入れることはできないのであるが、ここで研究者の視点がドイツ東部地域へ向けられた意義は大きい。ドイツ東部、ことにエルベ、オーデル川以東は、12-15世紀の植民運動によって開かれた、あるいはゲルマン化した地域であり、ドイツ西部に対して文化的には後進地であったのだが、ドイツ語の発展と養成の問題ではこの東部地域が、常に重要な役割をはたすことになるからである。

ところでルターの出現と、ドイツ語史上記念碑的な作品である彼のドイツ語訳聖書の成立をもって近代語の出発点としたのは、偉大な言語学者ヤーコブ・グリムであった。この学説が長く学界を支配したのは、言語学者としてのグリムの権威によることは勿論であるが、またドイツ語史を古代語時代、中世

語時代、近世(代)語時代とする三分が、歴史上の時代区分と一致するという明解なものであったことと、ルターが確かに言語的天才であったがためである。しかし一言語体系全体の変化が一個人の功績に帰せしめられることは正しくない。大きな影響を及ぼすということと、新しいドイツ語を創り出すということは明確に区別されなければならないのである。ところで、ルターを出発点とすることは、近代語開始の時点を生16世紀にとることである。この可否を問うことは、グリムの権威によって不動のものとなっていたドイツ語史の三時代区分法に対して疑問を提起することでもある。今世紀初頭の傑出した文献学者K. ブルダッハは、宗教改革を朔のぼること200年14世紀中葉のプラハのドイツ語を採り上げた。文芸の振興にも大いに意を用いたカール4世皇帝治下のプラハに、多くの文人が集まり、文芸が開花した。因にドイツ語圏における最古の大学は、1348年年カール4世皇帝によって設立されたプラハ大学なのである。ブルダッハは、この時代プラハの宮廷で養成されたドイツ語こそ、近代語の源流である、としたのである。すると14世紀を中世語の時代区分の中に算入することは理屈に合わなくなる。若干の学者が、初期近代語時代というものを提唱しだした所以である。近代語成立の問題の研究の展開は、この初期近代語時代(1350-1650)が次第に独立性を増してくるプロセスと歩調を合せているのである。始めは勿論、この時代区分は多くの学者の認めるところではなく、また採り上げられたとしても、仮りの時代、過渡期の時代としか見なされなかったのである。文芸学の分野でも優れた業績を残したブルダッハの近代語成立に関する学説は、卓見と独創に満ちたものではあったが、独断的なものでもあった。14世紀のプラハのドイツ語を近代語の基であると断ずることは許されないのである。

言語学の問題を中世の東方植民運動の軌跡と結びつけて考察し、方言学の研究史上画期的な展望を開いたのはTh.フリックスである。それまでドイツ言語学の対象が、専ら文学史上に場を占めるような作

品に偏していたのに対して、フリックスは民衆の話し言葉に目を向けたのである。彼の近代語成立に関する理論の要点をごく簡単にまとめてみよう。東部植民地への移動経路は、歴史学者や民族学者の努力によって現在かなり詳しく把握されている。それによると南ドイツから北ドイツに及ぶさまざまな地方からの農民達は、一旦マクデブルク、エルフルト、バンベルク等の拠点都市の一つに集まり、そこから平行して東へ向う三つの行路の一つをとって目的地へと移動していったのである。この移住民の進路を示す三線のうち南独と中部ドイツに拠点をもち二線が、マイセン地域で落ち合う。従ってここで各地からの移住民の話し言葉の中に一種の平衡言語が形成される。フリックスによれば、これこそ近代語の基盤であるとされたのである。

ここで近代語をどのように把握するかという困難な問題にぶつかる。言語の研究は音韻、綴り、語彙、シンタクス、文体等多くの分野を含むのであって、これらの一つだけをとりあげて近代語を云々してみても、その実体をとらえたことにはならないであろう。しかし従来までの研究が、多くの音韻と綴りの面に片寄っていたことは事実である。言語の総合的な考察という観点からは、フリックスのマイセン理論は弱点を露呈せざるを得なかったのであった。

以上簡単にみてきたように、多くの学者によってさまざまな説が提出されて来た。それらの説は否定されることによってドイツ言語学の発展に寄与してきたといえるであろう。現在においては、共通語は一つの特定地域から連続して発展してきたものであるという考えが否定され、中世の中期・末期のドイツ語圏全域に及ぶ言語平衡という広範囲な言語現象の動きの中から成立してきたものである、とみなされている。しかしこの実体の解明はきわめて困難である。各地に散在する文書館の膨大な資料を統計的に調査研究しなければならないからである。また言語学的な見地から重要な地域であっても若し文書館が存在しなければ、空白を埋めることはできない。ドイツ語圏全域に及ぶ言語の動きの実体を把握することは、まことに容易ではないのである。しかし言語が変化するという事は、言語のもつ重要な本質の一つなのであって、これを研究することは、言語学の重要な課題であるといえる。しかも変化を惹起するものとして、人為的な、あるいは社会的な要因を無視するわけにはいかない。ここにドイツ近代語成

立の問題にとっても社会言語学的な視点が重要な意義をもってくるのである。

私はブルダッハが称揚したのとは別の観点からプラハのドイツ語に関心を持っている。その歴史はプラハ市のおかれた特異な環境から中断と再使用の数奇な運命を辿るのである。支配者階級たるドイツ人の言語であったドイツ語は、フス動乱を頂点とするチェコの民族運動の嵐の中で言語変化のどのような様態を示しているのであろうか。言語の変化の問題にとって興味あるモデルケースを提供するであろう。幸いプラハ市文書館には、当時の資料がよく保存されているので、将来実地調査研究の機会が持てることを希望している次第である。

注 普通ドイツ語史では近代語、中世語といういい方をしない。新高独語、中高独語というべきなのだが、ここでは簡単にするために、多少、不正確な云い方をしたことをおことわりしておきたい。

(外国語助教授)



《原理運動を問う》

野田 秦三、石井 直人

現在、広大校内では「アメリカ建国 200 年祭記念」として、第 4 回国際指導者セミナーのキャンペーンが盛んに行なわれているが、これは単にアメリカ建国 200 年を祝う行事のためになされているわけではない。少し注意すればよく解かるが盛んに PR 活動をしているのは統一協会＝原理研究会の人達である。現に、パンフレット及び校内数ヶ所のアメリカ建国 200 年祭に関する大きなたて看板の「主催、連絡先」は「広島市東雲本町 1 丁目 3 - 3 国際指導者セミナー事務局、電話番号 0822 (81) 5304」は統一協会東雲寮と同住所である。つまり、大々的、鳴り物入りで国際指導者セミナーなるものに 120 名もの広大学生、他大学生・院生をアメリカに送り込もうとしている主催者は統一協会と思ってよい。それでは、統一協会側としてはいかなる意図によって 120 名もの学生・院生を送ろうとしているのだろうか。そして又、留学のためにはこの程度の規模の多大な費用を用することになるのだが、一体そのような費用は何処から出るのが疑問である。

＊

そうした事は最近の広大での原理運動の動向を掴めば明らかになってくることである。例えば至る所にばら撒水れているピラで「Can America be different?」という題目で矢のつめをもった鷹や片目ウィンクのひよこ、にこにこうさぎ等々のさし絵入りのもの、きつとどこかで皆さんのお目にふれていると思うが、この主催＝全国共産主義問題研究会もまた実は原理運動の別称なのである。それだけではない広大教養部時代の「広大キャンパス」という新聞、この二月に発足したと自称している「暫定自治会」「広島大学新聞」「世界平和教授アカデミー」、さらに「I. O. W. C.」「共産主義問題研究会」「RESEACH・COMMUNISM」「全国大学連合理論研究会広島支部」、「統一思想研究会」全て校内での原理運動の一環として捉えることができる。このように校内で種々な仮称のもとに動いている原理運動は、一貫して勝共、自由主義支持を唱えている。これはとりもなおさず原理研＝統一協会が政治的には国際勝共連合と全く表裏一体であること

を考えれば納得できる。国際勝共連合の正式の発足は、昭和 43 年 1 月に文鮮明がソウルに「韓国勝共連合」を結成したのを受けて、同年 4 月、日本統一教会々長・久保木修己、名誉会長・笹川良一らが結成したのに始まる。他方原理運動は、キリストの再臨としての文鮮明を頭にいただいた自称キリスト教団（正式名＝世界キリスト教統一神霊協会。昭和 29 年 5 月ソウルにて成立）である。故に勝共連合をその政治的側面として持つ原理側としては、より優秀な学生をアメリカに送って、アメリカや日本での布教のための土壌を固めていこうとしていると見ることができる。（なお、彼等のピラによれば、留学中の講義には「統一思想講義」が含まれている）。校内での原理運動において宗教団体として特に奇異に感じられるのは、上述したように彼等が種々な仮称＝仮面を手を変え品を変えて使うという態度の一貫性のなさである。真の宗教ならばそのようないわば政略的な思わくでもって自らの団体名を変える必要が何処にあらう。そこに私達は、政治的戦略によって変化する宗教団体の欺瞞性を見ることができる。

＊

そうした一貫性のなさは、又校外での原理運動にも同様に見られる。かつて街頭で、もしくは家々を訪問して花を売ったり（島根大学において一時原理運動に関係していた A さんによればおよそ花一束 300 円として 1 日に 30 本ぐらいはさばけて、1 人 1 日 1 万円余りは売り上げがあるという）一頃は、台湾バナナ、朝鮮人蔘茶（幸世商事の高麗人蔘茶の名で売られその宣伝は広大キャンパス第 3 号に掲載されている）等を強引に売りつけ、人蔘茶が薬事法違反で行商販売禁止の疑い？になると（県庁薬事課の人の話しによると「人蔘茶を食品（つまり普通のお茶！）として売っていくのなら、行商販売禁止にはならないが、なんらかの薬効があるとして売るのはいけない」ということである。）最近に至っては合成樹脂で細工したアクセサリ、スズなどを売っている。又、それだけではない、同 A さんによると「その日の朝刊に載っていた人の同情心を呼ぶような記事をピックアップしてそれを募金